

こちら月見屋
壺

夏川 丁

第一幕 来客

「暇ですねえ」

月と蛍の光だけで照らされた庭に、十六夜が煙管の紫煙がふうっ・・・と吹きだした。煙は少しの間宙にとどまったが、しばらくすると跡形もなく闇に溶けてしまう。

ここは、月見屋。何でも屋である。万屋ともいう。代金さえ払ってもらえれば、大抵のことはやる仕事だ。今の現代では何でも屋はほとんど無くなってしまったが、ここは現世とは別の場所。妖怪の類が住む世界だ。現世とリンクしているわけではない。パソコンなどの電子機器類はほとんどないし、灯りも未だに蝋燭だ。不便といえば不便だが、現世の日本ではほとんど見かけなくなった蛍が、こうして平然と飛んでいる。空は澄み渡り、水はどこの川でも美しい。

川の向こう岸で、魂蟲が飛んでいるのが見えた。緑色の光が尾を引いて、空中に弧を描く。

「ちょっと蟲取りをサボりすぎましたかね」

月見屋の仕事の一つに、蟲取りというものがある。魂蟲などの雑魚同然の妖怪は、増えすぎると普通の妖怪に危害を加える。そのため、増えすぎた蟲を駆除するのだ。駆除専門ちゃんとした期間があるのだが、あまりにも暇な

魂蟲とは、妖怪の世界ではザコ中のザコ。その名の通り、虫みたいなもんだ。妖怪というくくりは、現世で言う生き物と同じになる。生き物にも、人間や獣、虫とあるように、妖怪にもそういう分類がされてある。

「ごめんください」

玄関で、十六夜を呼ぶ声がした。雁首の煙管の中に入ってある灰と煙草を捨て、客の元へ向かった。

「はいはい。どちら様ですか」

戸を開くと、女性が一人だけ立っていた。

桔梗の描かれた着物をまとっている。紅をさした色白でほっそりとした顔は、ゆったりとまとめられた黒髪に縁取られて一層美しく見えた。二十歳もなっていないだろうに、寂しげな雰囲気漂わせる女性は、色気もかもし出していた。うつむき気味だった視線をゆっくりと上げ、まっすぐ十六夜に向ける。

「貴方が十六夜さんですね。依頼があるんです」

「どうぞ。あまり良い茶葉ではないのですが」

「いえ、おかまいなく」

ふわりと笑う女性。彼女を花にたとえるなら、百合か鈴蘭といったところか。儂げな美人だ。だが、それ以前に十六夜には一つだけ気になっていることがあった。

「貴女、妖怪ではないでしょう」

ずばりと気になる点をつくると、女性は湯飲みを持ったまま硬直した。茶に目を落としたままの女性に、十六夜は容赦なく視線を浴びせる。

「人間・・・正確に言えば死人。霊となった貴女が、なぜこんなところにいるのですか。早くあ

の世に行って、閻魔大王たちの裁判を受けなくては」

別に、責めているわけではない。十六夜は、困り果てたようにくるくるの白髪天然パーマを、わしゃわしゃと掻き毟る。紅い瞳の目は、不眠症なのかひどいクマができている。まつげまで白い毛に赤い瞳。その姿は、さながらアルビノのウサギのようだった。現世だと物珍しい目で見られることは必至だが、この世界だとこういう変わった色はザラだ。だが、彼の着ている着物は、大分と独特のものだ。藤色がメインの着物だが、袂の半分がたまご色に染められたグラデーション。その中間に、丸の中に「兎」と書かれた印が描かれている。月見屋の制服みたいなものだ。といっても、従業員は主人である十六夜だけなのだが。

ときたま、こういう客が訪れるのだ。

生前やり損ねたことをやるために、何でも屋である月見屋へ訪れる客が。こういう客は、大体が追い返そうとしてもてこでも動かない。それもそうだ。あの世から脱走してまで、その願いをかなえに来た。ただならぬ決心と、努力のなした結果だ。「ダメ」の一言で追い返すのは、十六夜としても気分が悪い。

「分かりました。用件を伺いましょう」

「あ、ありがとうございます！」

礼を言ってから、女性はゆっくりと語りだした。

彼女の名は、花。名は体をあらわすとは、よく言ったものだ。

花は、大正時代に現世の茶屋で働いていた。饅頭が名物の茶屋だ。花は、その看板娘だった。多くの男が、花に想いを寄せた。花目当てで茶屋を訪れては、名目の饅頭を買っていく。おかげで、店は繁盛していた。

「饅頭を二つおくれ」

ふいに声をかけられ、ふりむいた。

第二幕 過去

彼女の名は、花。名は体をあらわすとは、よく言ったものだ。

花は、大正時代に現世の茶屋で働いていた。饅頭が名物の茶屋だ。花は、その茶屋に住み込みで働いている。彼女は、そこの看板娘だった。多くの男が、花に想いを寄せた。花目当てで茶屋を訪れては、名目の饅頭を買っていく。おかげで、店は繁盛していた。

「饅頭を二つおくれ」

ふいに声をかけられ、ふりむいた。

そこには、見知らぬ若い飛脚が、まっすぐな眼差しで花を見つめていた。

「焼き饅頭。二つおくれ」

低く甘い声と、誠実さがあふれる目。輝かんばかりの顔立ちというわけではなかった。だが、好きだ、と思った。一目惚れだ。

饅頭を包む手が震える。普通なら、さっさと包んで、笑顔で手渡すのに。それだけの作業なのに。紙包みを作りながら、ちらちらと男の様子を伺う。引き締まった体に、黒く焼けた手足。ねじり鉢巻がよく似合った。彼の顔を見て、遅い、とイライラしていないか確かめる。隣に置かれた椅子に座っているおじさんに、話しかけられていた。かすかに聞こえてくる内容からして、「君も花さん目当てかい」といった内容だ。どう返事するのかと、耳を澄ます。しかし、男はふっと目を細めて笑ったが、なんと答えたかまでは聞こえなかった。飛脚は、手紙や荷物を運ぶ仕事だ。遠くまで行くのか。もうしばらくは会えないのかもしれない。

「あの、お饅頭、包めました……」

なぜか目を合わせるのが小恥ずかしく、目を伏せながら包みを差し出した。

「ありがとう。…ん……？」

受け取り、中身を確認した男は目を細めて眉間にしわを寄せた。

「すまん、饅頭が一つ多いんだが……」

「あ、すいません…！飛脚のお仕事をされているようでしたので、一つだけオマケに……。申し訳ありません！今すぐ取り替えて……」

「いや、いい。ありがとう」

それだけ言うと、彼は代金を花に手渡し、踵を返した。手のひらに握らされた小銭は、どう見ても多い。饅頭5つ分くらいの代金だ。渡し間違えたのか。慌てて彼を追いかけて店を出たが、さすが飛脚というだけあって足が速く、彼の姿はどこにも無かった。

目の前に店舗を構えている質屋の主人が、「花さん、今日も綺麗だね」と声をかけてきた。だが、花の耳には届かない。ぼんやりと手の中の小銭を見つめる。また、彼が店を訪れた時に、この小銭を返そう。そして、できることなら、彼の名前も聞いてみよう。

もう出発してしまったから、次に会えるのは何ヶ月の先だろう。でも、待とう。あの人が、私どころか店のことも忘れていても。道ですれ違うだけでいい。また会いたい。

「饅頭おくれ」

一ヵ月後。再び、あの男が店を訪れた。

予想外に早い帰りに、花は驚きを隠せない。まだ心の準備ができてない。

「焼き饅頭、ふたつ」

品物を包みながら、やはりちらちらと男の様子を伺う。前より、さらに肌が焼けている気がする。南のほうへでも行ったのか。花は遠出をしたことがないので、あまり遠くのことはわからない。

男と目が合った。はっと目をそらす。相手も目をそらしたようだった。もう一度、恐る恐る顔を見る。すると、男もこちらをそっと見ていた。あまりに遅いから、しびれを切らしたのか。いけない、嫌われてしまう。

「遅くなってごめんなさい！あの、それと・・・」

ぱたぱたと男の下へ駆け寄る。ずっと、自分の部屋の宝箱の中に大事にしまっていた小銭を握り締めて。ふわりと潮の香りがした。海のそばを走ってきたらしい。花の取り出した小銭を見ると、男は目を丸くした。

「ひょっとしてこれ、この前の・・・」

「はい。二つ分だけでよろしかったのに、五つ分以上の代金を払われていらっしやったので・・・。お客様のお金を使い込むわけにも参りませんし・・・」

男の目を見れずに、一息に話そうとする。歯切れが悪くなっているのが、自分でもわかった。恥ずかしい。とにかく恥ずかしい。

「それで、今回の分も含めて、これだけおつりを渡そうと思って・・・ずっと・・・」

ようやく、男の顔を見ることができた。そして、拍子が抜けた。色黒の彼の顔が、それでも分かるくらい赤酸漿のように赤い。常に無表情だった彼の顔が、自分と同じように赤面している。

「いや、すまない・・・。まさか、まだ持ってもらえてるとは、思えなくて・・・」

誤ることは何もないのに、必死に弁解しようとする。その不器用なところが、さらに愛しく思えた。

「文を運んでいる間も、ずっとこれが気になってしまって、仕事に身が入らなくて・・・。いや、これがというか貴女のことが・・・いや、なんでもない！忘れてくれ！」

おつりの小銭を受け取ると、彼はすぐに通りに走り出す。

「待ってください！」

また数ヶ月会えなくなってたまるか。花が呼び止めると、彼は勢いよく止まって、ゆっくりと振り向いた。その顔は、さっきよりも赤く染まっている。異様に汗をかいている。ねじり鉢巻にしている手ぬぐいを取り、口を隠していた。眉間にしわを寄せ、一刻も早くこの場が立ち去りたいというように、足踏みをしていた。

「あの、あの・・・。お名前を伺ってもいいですか。私は花といいます。それと、よろしければ、また、来てください。待ってますから。焼き饅頭、置いておきますから」

「佐々木兵衛。・・・どうも」

それだけ言うと、彼は再び走り出した。

佐々木 兵衛。彼の名前。ほう、と息をはいた。

それから、兵衛は何度も茶屋を訪れた。数ヶ月ごとにだが、仕事を終わると必ず茶屋にやってきました。そして、短文ながら、旅の出来事を花に話すのだった。目を合わせることはなかなか難しいようだし、最後は顔が夕日のごとく真っ赤になって帰っていった。最初は対抗心を燃やしていた周りの客たちも、花がまんざらでもない様子を見て、花の幸せを祈って退いていった。

数ヶ月して、ようやく兵衛から想いを伝えた。なんとも不器用で、ロマンチックのかけらもない、彼らしい告白だった。めでたく、二人は恋人同士となったのだ。将来を約束した仲だった

。

そんなある日。二人の間に、大きな問題が発生する。

「お前が花だな？」

いつもどおり、男たちのナンパを軽くかわしながら花が仕事をしているとき。一人の男が、花に声をかけた。

男は、とても上等なビロードを身にまとっている。きつい目つきと、オールバックにした髪形が印象的だった。乗ってきた後ろの馬車もとても豪華だった。こちら辺では有名な資産家で、名を西本東助といった。彼の祖父の代から大層な金持ちで、彼は王様のように甘やかされて育てられた。欲しいと思うものがあれば、金さえ出せば簡単に手に入るのだ。

「私の下へ嫁げ」

いきなりやって来て何を言い出すんだ。花だけでなく、近くにいた客たちも総出で反対した。その様子が気に食わなかった西本は、従えてきた大柄の男たちに客を押しえつけさせ、花と一对一の話し合いに出た。

「私の妻になれば、贅沢な暮らしができる。こんな下働きで、人生を終わらせたくないだろう？」

「そんなことはありません。私は、今のこの生活で十分に満足しています」

花は、一切物怖じせずに、堂々と西本の誘いを跳ね除ける。生意気なその態度が、さらに西本の怒りに油を注いだ。だが、下手に怒りをあらわにしてはいけない。無理やり連れて行こうと思えば、簡単にできる。だが、それでは蛮人と同じだ。暴力以外の方法で、なんとしてもこの儂げな美人を自分の妻にしてやる。

「お前、田舎の両親に仕送りをしているそうだな」

西本の言葉に、ぎくりと体をこわばらせる花。しめた、とばかりに畳みかける。

「両親ともども年老い、とても仕事なんてできやしない。しかも、母親は病気持ち出そうじゃないか。今の稼ぎでは、実際きついのだろう？」

すべて事実だった。

花はもともと田舎の出で、年老いた父親と病気持ちの母親を支えるために、都会に出てきた。だが、就職はできたものの、稼ぎは両親への仕送りで精一杯。自分の宿代や飯代まで稼げないので、茶屋に住み込みで働いている。茶屋の主人はいい人だが、たまに体を触ってきたりする。止めてくれといっても、とぼけて聴く耳を持たない。あまりしつこく言うと、給料を下げるといわれる。耐えるしかないのだ。

花は、身も心も崩壊寸前だった。

「私が、お前の親父さんの生活費も、お袋さんの治療費も、全部背負い込んでやるさ。だから、私のところへ嫁に来い。な？」

究極の選択。だが、花には一択しか答えはなかった。

一ヶ月もしないうちに、結婚式が挙げられた。

西本家主催の、町を挙げての結婚式。茶屋の看板娘が、資産家に嫁入り。素晴らしいシンデレ

ラストストーリーだ。だが、花と兵衛の間柄を知っている茶屋の常連たちと、花自身は何も幸せではなかった。

町中を、人力車に乗って練り歩く。町の人が、祝いの言葉をかけながら花びらをまく。やめて、と泣き叫びたかった。涙が浮かんだが、傍から見れば嬉し涙にしか見えなかった。まさか、花嫁衣裳に身を包んだ花のことを、愛しい人と結ばれなかった悲劇のヒロインなどと、誰が思うだろうか。

そのとき、人ごみの向こうに、今一番見たくない人の顔を見つけた。

兵衛だ。

ぽっかりと口をあけ、目を見開き、いつも真っ赤に染めていた顔が、血の気がなくなったように青白い。息を切らし、汗をかいている。仕事から帰ってきて、異様な町の騒ぎのように何事かと駆けつけたのだ。

何か言いたかった。違うんです、と弁解したかった。

私が愛しているのは貴方だけ。貴方だけ。仕方なかったんです。信じてください。

だが、花は恐れた。隣に座る西本の怒りを買うことを。町中の人々の目が、冷たく変わることを。ただ座って、彼の前を通り過ぎてしまった。

人力車が彼の前を通り過ぎた瞬間に、兵衛が走り出したのが目の端で確認できた。一生懸命、人力車を追いかけてくる。花の名前を大声で呼ぶ。のどが裂けんばかりの大声で。彼の俊足があれば、簡単に追いつけるはずだった。だが、今は大勢の人ごみの中。人を掻き分けて進むのは、容易なことではなかった。

「花さん！花！」

初めて、名前を呼び捨てで呼ばれた。嬉しかった。

できることなら、貴方と夫婦になりたかった。でも、ごめんなさい。私には、西もとの隣から飛び降りて貴方の下へ走り寄る勇気も、ましてや振り向く勇気さえないんです。本当にごめんなさい。

花の顔が、低く響くものに耐えるように、ゆがんだ。まっすぐ前を見ながら、涙をこぼすまいと唇をかむ。その顔の滑稽で、悲しいことと叫びたくなかった。

次第に、兵衛の声が一片も聞こえなくなった。

ごめんなさい。私は、この人から逃げることはできない。今生で添い遂げることはできなかったけれど、もし、あの世というものがあるのなら。どうかそのときは、私と一緒にしてください。

第四幕 行動

「要するに、その兵衛さんを探し出してほしいというわけですね」

「はい。どうしても、会いたいんです」

西本家に嫁いだ花は、そのまま西本夫人として死んだ。彼女の人生に大した罪は犯していなかったのに、文句なしで天国へ逝ったのだ。もちろん、花は月見屋に来る前に、あの世中を探し回った。だが、彼はどこにもいなかった。地獄に逝ってしまったのか、とわざわざ地獄まで行って探した。だが、そこにもいなかったのだ。

地獄の裁判を勤める閻魔大王に聞いてみたが、なにせ日本の死者をすべて裁かなければならないのだ。多忙を極めている彼が、すべての罪人を覚えているわけがなかった。

あきらめて、転生しようと思っていたとき。あの世の住民が、ある何でも屋の噂をしているのを耳に挟んだ。

「妖怪の世界にある『月見屋』という何でも屋は、代金さえ払えば何でもやってくれる」

「では、代金は？」

「これで、足りればいいのですが・・・」

彼女が、懐から取り出したのは、両手サイズの風呂敷包み。床において開くと、中には二十本あまりの豪華な装飾の施されたかんざしなどの髪飾りが積まれていた。

「東助さんが買ってくださいましたものです。こんなにいらないのに、私の心を手に入れるために必死になって・・・。私の心が、こんなもので買えると思ってるんですから」

「これはこれは。貴女も意地が悪い。多少は心を傾けてあげてもよろしかったでしょうに」

「あら。十六夜さんも、片思いをされたことがあられるのかしら」

「いえ、全く。私は、昔から友達とばかりつるむ、一人身ですよ」

上の歯だけを見せてふっと笑う。いや、この顔は「笑う」というより「嗤う」だろうか。すこし小馬鹿したように嗤う。独特だが、彼の怪しげな雰囲気には合っているかもしれない。

「引き受けましょう。愛しい人に会いたいという願いは、割と多いのでね」

すっと立ち上がると、部屋の中央に置かれた黒電話に手を伸ばした。ジーコ、ジーコと、懐かしい音が鳴る。

「もしもし。ちょっと頼みたいことがあるんですが」

「ったく。ほんまに狐使いの荒いやっちゃんなあ」

『狐の嫁入り』と書かれたのれんの掛けられた店の前に、十六夜と花、そしてもう一人。目尻に紅の化粧をした、狐顔のひよろりと長身の男。

「いいじゃないですか、銀さん。またお稲荷さん作ってきますから」

「男の握った稲荷寿司なんぞ、普通美味くないがな。お前の作るお稲荷さんは、ほんまに美味いからなあ。ま、持ちつ持たれつでいってもらえれば、こちらとしても都合がええし」

情報屋『狐の嫁入り』の主人 銀。

十六夜とは、子供の頃からの親友。人付き合いが人一倍上手く、多くの人脈を持っている。だが、のらりくらりとした性格で、就職に向いていなかった。結局、自分で店を立ち上げたのだが、人脈をフル活用できる転職で、これが思いの外大当たり。今の所、金回りは大分いいようだ。

「で、代金は十六夜特製の手作り稲荷。依頼はなんや？」

「彼女の恋人、佐々木 兵衛さんを探して欲しいのです。花さん、具体的な彼の特徴などの説明をお願いします」

事務所に通された花と十六夜。中は、和風がメインとなった、ゆったりと落ち着くデザインだった。壁に牡丹などの花や、鶴などの鳥類が描かれていたり、オシャレに心がけているようだ。いささか派手な気もするが、そこは主人の趣味だろう。弁護士事務所などの堅苦しさもなく、かといって遊郭のようなはっちゃけすぎている様子もない。それぞれ個室に分けられていて、障子が閉じられている。床には、草履や下駄が丁寧に置かれている。手前の二つからは話し声が、ひとつ飛ばした部屋からは泣き声が聞こえた。

「ほれ、入りいな」

「失礼します」

「失礼します」

下駄を脱いで、部屋にあがった。畳が敷き詰められた床に、長方形の机が真ん中に置かれている。廊下とは違い、落ち着いた雰囲気だ。

「じゃ、似顔絵描いてみるんで、話してみい」

「そうですね……。日焼けして、色は黒くて……。目は、ちょっと釣ってるかんじなんですけど、本当に誠実そうなんです！それと」

「十六夜。こりゃ、長くなると思うんやけど」

「……………我慢してください。これも、仕事のうちと思って」

「えー……こんな感じ？」

「はい！本当にそっくりです！」

ようやく完成した似顔絵は、似てないこともないが、少々よく描かれすぎている気がしてならない。花が納得するまで、十数枚も描いてやった。銀の右手は墨だらけだ。

「十六夜よお……。本音言うてええか？」

「この仕事が終わったら、稲荷寿司と一緒に、酒をおごりますから。今は、耐えてください」

十六夜も、傍で何もせず小一時間も待ち続けるのは、正直すごく辛かった。常に寝不足なので、ほとんど寝ていたが。

「佐々木 兵衛やったか。探しといたるわ。見つけたら、連絡したるから」

この似顔絵で見つかるのか、と眉間にしわを寄せて、金色の細い髪をわしゃわしゃと掻き揚げる。ゆるくウェーブのかかった金髪は、前髪も長い。後ろでゆったりと結っているが、緩すぎて数束ほど髪が落ちている。

「ありがとうございます」

約二ヵ月後。銀から、十六夜のもとへ返事があった。花は、十六夜のところに匿ってもらっている。炊事などの家事をずっと一人でやっていた十六夜としては、とてもありがたい働き手だった。

「花さん。兵衛さんの居場所が、分かりました」

第五幕 行方

「転生・・・した・・・？」

銀が突き止めた真実は、兵衛がとっくに転生した、というものだった。

死んで、裁判を受けて、彼は天国逝きを受けた。しかし、兵衛は天国へ逝かずに、転生を選んだ。花を待たずに、次の人生を歩むことを決めたのだ。

「その男がどんな考えを持ってそうしたのは、オレには全く分かりかねんがな。事實は、それだけや」

銀の知り合いに、閻魔大王の裁判所で働いている鬼がいたのだ。その鬼から頼んでもらって、閻魔帳を拝見させてもらった。すると、花が死ぬよりも前に、正確に言えば、花が西本家に嫁いだその年に、死んでいたことも分かった。

兵衛の死因は、窒息死。自殺だった。

「花さん。大丈夫ですか」

震える花に、声をかける。だが、花は手で顔を隠し、ぽろぽろと涙を流す。

やはり、彼は自分を許してなどくれなかった。それはそうだ。将来を約束した愛する人に、簡単に裏切られた。それも、金持ちかどうかというだけで。きっと、強く恨んだことだろう。

「あ、言い忘れとった。これこれ」

そう言って、銀は金糸で刺繍がされた豪華な着物から、一通の手紙を出した。

「彼からの手紙やって。大王から預かったよ」

花が、恐る恐る手紙を開く。

どんな罵語雑言が書かれていても、覚悟の上だ。

花へ

先に、貴女を待たずに転生してしまったことを、謝らせて欲しい。

許せとは言えない。私が守りきれなかった。私が、貴女を一人にさせてしまったのだから。

責めるつもりではないが、貴女と西本の旦那が人力車に乗っているところを思い出すと、今も腸が煮えくり返る。でも、貴女の花嫁姿はとても美しかった。あの姿を、私の隣に立ってもらえれば、どれだけ嬉しかったか。

もう叶わぬことは分かっている。それでも、私は貴女を愛していた。

終わりのないあの世で貴女と暮らすより、終わりがあるからこそ大切さの分かる現世で、また貴女と会えることを信じたい。

私は貴女を忘れない。たとえ、姿かたちが変われども。

だからどうか、貴女も私を忘れないで欲しい。

佐々木 兵衛

唇をかみ締めて、ほろほろと涙を零す。嬉しい。でも、情けない。

「許して欲しいだなんて……。許して欲しいと願ったのは、私のほうなのに。側にいられなかったのは、貴方のせいではないのに……」

「花さん。兵衛さんの居場所も、心情も、すべて分かりました。どうなさいますか？」

袖で涙をぬぐうと、凜と十六夜を見つめなおした。

「現世に向かおうと思います。あの方が覚えているかも分からないし、私が彼を覚えていられるかも分からない。でも、会いたいのです」

「分かりました」

ふわあ、とあくびをすると、一枚の紙切れを手渡した。

「転生する門への行き方です。貴女は、あの世から脱走してきた犯罪者だ。下手をすれば地獄逝き。こっそり乗り込んでくださいね」

パチン、とウインクをしてみせる。紅い瞳が、キラリと光った。銀は、はあ、と呆れたため息をつく。

「お疲れ様でした、銀さん」

「お前もな、十六夜。あのお嬢さん、うまいこと転生できたかのお」

二人のお気に入りの飲み屋『飲んだくれ』。注文した日本酒を、とくとくと杯に注ぐ。部屋の中央の行灯の火が、酒の水面に映し出される。

「それより、十六夜。いや、泉。お前、いつまでそんなことしとるつもりや」

「……なんのことですか」

厳しい口調になった銀の質問に、十六夜はしらばっくれる。真正面から向き合って話していたのに、目をそらして肴に箸を伸ばす。

「分かりきつとるくせに。その喋り方も、一人称も、着物も、何もかも」

「やめてください」

「お前には何の責任もない。お前のお師匠さんが亡くなったのも……」

「やめろ言うとするのが分からんのか！！」

突然大声を上げた客に、店員や、仕切りの奥で飲んでいた別の客が、何事かとざわついた。我に返った十六夜は、席を立った。

「少し酔ってしまったらしい。代金は明日支払います。銀さん、加減は考えて飲んでくださいね。失礼します」

「酔ったって……。お前、杯一杯分しか飲んどらんやろうが」

「それと、銀さん。私は、泉などという名ではありません。十六夜です」

下駄をひっかけ、カロンカロンと出て行く。

「お客様、外は雨が降っているようです。傘をお貸し致しましょうか？」

「いえ、結構です。ありがとうございます」

店員の薦めも、ほとんど考えずに断る。上の歯だけを見せる、独特の怪しい「晒い方」。白い髪と、赤い瞳に黒い目の下のクマ。不気味だ。

雨に濡れ、とぼとぼと明かりも灯さずに、人っ子一人いない道を帰路に着く彼の背中。それは、さながら兎のような小動物のごとく小さかった。